

# 1 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続を求めて

## (1) 幼小の円滑な接続が求められる背景

- ・ 幼稚園から小学校への環境の変化、教育内容や教育方法の変化にスムーズに対応できず、小学校で十分に自己を発揮できない子どもたちが見られます。
- ・ 学習教育要領等の改訂において、幼稚園から高等学校までを見据えて育む資質・能力の3つの柱が示されたことで、子どもの連続した育ちの保障がより求められています。
- ・ 幼児教育の成果を小学校教育につなぐことで、小学校での生活や学びを充実させ、子どもたちが自己を発揮して生き生きとした学校生活を送ることが期待されます。

## (2) 本市の実態

- 本市では、市立幼稚園9園、市立認定こども園2園、市立保育所4施設、認可保育所5施設、私立幼稚園3園、私立認定こども園4園、認可外保育園1園が設置されており、様々な形態の中で、幼児の教育・保育が行われています。

「幼小接続に関するアンケート調査」の結果より

(R元. 9月 市立幼稚園・認定こども園11園、市立小学校16校を対象に実施)

- ・ 送り出す幼稚園等に比べ、受け入れる小学校では、市立・私立含め1園から16園まで多くの幼稚園等から入学してくる **「小学校では様々な学びの子どもを受け入れている。」**
- ・ 交流連携を図っている学校や幼稚園等の数は、1校や1園等が約7割で最も多い。  
**「近隣の小学校や幼稚園等との交流・連携に止まっていることがうかがえる。」**
- ・ 交流・連携の内容は、単発の行事や活動が多い。
- ・ 授業参観・保育参観等についてはほとんどの学校や幼稚園等で実施。
- ・ 成長や学び、教育内容などについての協議は少なく、教育課程の話し合いも限られた幼稚園・学校のみ。 **「幼稚園等と小学校の認識の差が大きく、相互理解が十分ではない。」**

- 本調査により、幼小それぞれの教育内容や子どもの成長や学びについての相互理解を図り、成長や学びの連続性と発達を保障する手立てとして、接続期のカリキュラムを編成していく必要性が明らかとなりました。

## (3) 本市教育委員会の考え

- 幼児期の教育と小学校教育の連携については、その重要性に鑑み、「二本松市教育振興計画」の重点的事項として「幼児教育と学校教育の連携」を掲げ、幼児期からの適切なアプローチや幼児教育と学校教育の連携による取組みの必要性をあげています。
- 二本松市教育委員会では、すべての子どもたちが生き生きとした学校生活を送ることができるよう、子どもの育ちや学びの連続性を保障することが極めて大切であると考えています。そのためには幼小の円滑な接続が必要です。接続をより有効なものとする具体的な取組みとして、幼児教育・小学校教育双方の教育や子どもの育ちや学びについて理解を深め、子どもたちの学びや育ちをスムーズにつなげていくための接続期のモデルカリキュラムを市の幼稚園・認定こども園、小学校等に提案し、円滑な接続の推進に努め、教育・保育の充実を図ってまいります。

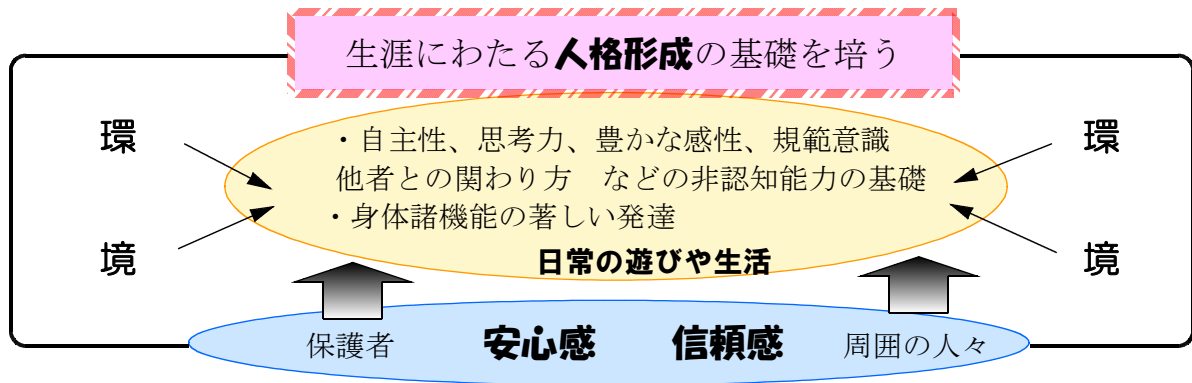
# 2 接続期における教育・保育の視点

## (1) 接続期とは

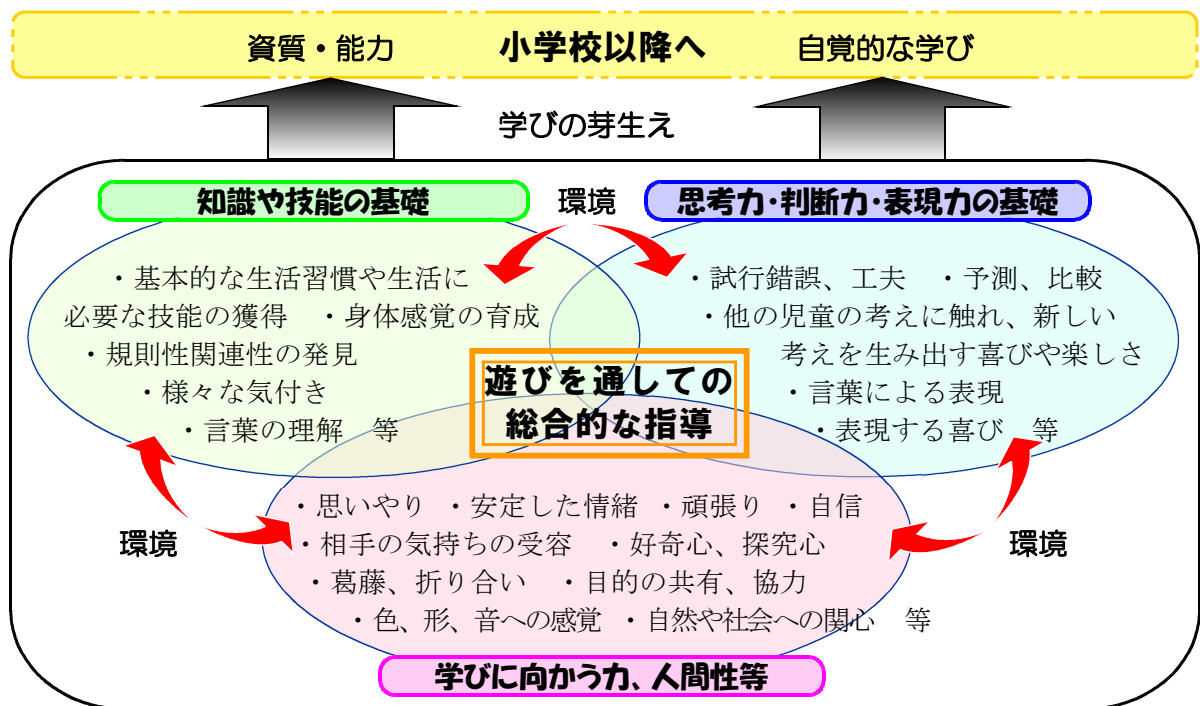
- 一般的に5歳児の後半頃から小学校1年の1学期前半頃を指しますが、各幼稚園・小学校の実情に応じて期間は異なります。

(2) 幼児期の教育の特性

- 幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものです。幼児期の教育の中核となる幼稚園やこども園、保育所などの幼児教育の施設では、幼児期にふさわしい生活を展開する中で、様々な生きる力の基礎を培っていきます。



- 幼児期においては次のような資質・能力の基礎を育て、小学校以降につないでいくことが求められています。



参考：H28. 12中央教育審議会答申資料

- 新幼稚園教育要領等には、幼児教育において育みたい資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿として、下記の10の「**幼児期の終わりまでに育ってほしい姿**」が示されており、小学校と子どもの姿の共有をしたり、教師等が指導する際に考慮したりするものとなっています。

①健康な心と体 ②自立心 ③協同性 ④道徳性・規範意識の芽生え ⑤社会生活との関わり ⑥思考力の芽生え ⑦自然との関わり・生命尊重 ⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚 ⑨言葉による伝え合い ⑩豊かな感性と表現

(3) 小学校教育の特性

- 小学校では、「学ぶ」ということに意識をもって、「自覚的な学び」ができるようになります。学校の時程に沿って、学校教育全体や各教科等の中で出てきた様々な課題を自分のこととして捉え、計画的に学習を進めていくことができるようになります。

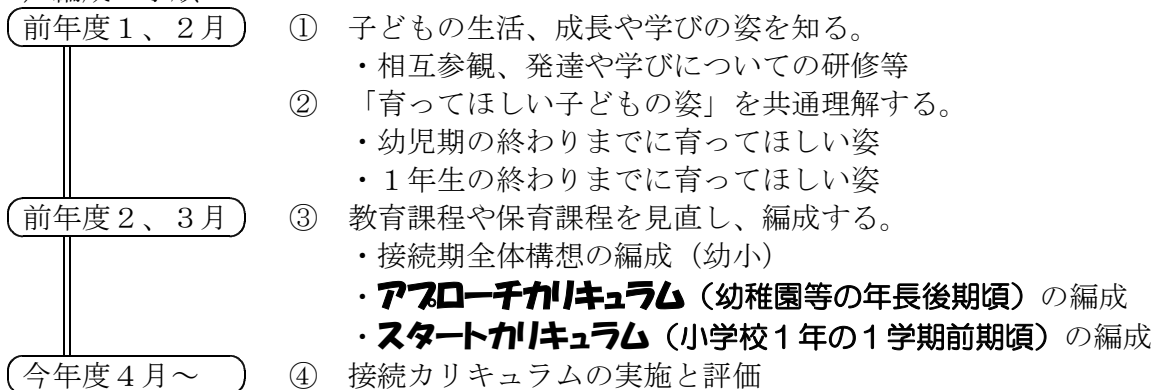
#### (4) 育ちと学びをつなぐ ー接続期カリキュラムの必要性ー

- 幼稚園等と小学校は教育内容や方法などの違いはありますが、一人の子どもの成長や学びは連続性があり、途切れるものではありません。幼稚園等での教育は小学校以降の教科等の学習などに直結するものではありませんが、その後の学校教育全体の生活や学習の基盤を培う役割を担っています。子どもの発達や教育を見通して、幼児期にふさわしい遊びを通して幼児期に育みたい資質・能力を十分に育むことが大切です。小学校教育の先取りではなく、集団生活の中で他者との関係を築きながら十分に遊び込んでいけるような指導が大切です。
- 小学校においては、幼児期の教育での成長や学びの姿を理解し、それを生かしていくことが必要です。特に、小学校の入門期においては、幼稚園等での学びや生活の仕方などを取り入れながら、子どもたちの成長の足跡が生かされるような工夫が大切です。単なる準備や慣れ、適応のための期間ではなく、「学びの芽生え」をスムーズに「自覚的な学び」につないでいくための大切な期間であることを認識する必要があります。
- 幼小が相互理解し、同じ認識で子どもの指導に当たっていくためには接続期の在り方を可視化していくことが大切です。誰もがつかないでいくことができるよう、接続期のカリキュラム(**アプローチカリキュラム・スタートカリキュラム**)を編成していくことが求められています。

### 3 接続期カリキュラム編成に当たって

接続期カリキュラム(アプローチカリキュラム・スタートカリキュラム)の編成に当たっては、下記の(1)(2)及び市のモデルカリキュラム(アプローチカリキュラム・スタートカリキュラム)を参考に、**それぞれの園や学校の実態に応じて自校化を図っていくこと**が大切です。

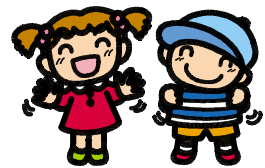
#### (1) 編成の手順



#### (2) 編成のポイント

##### **アプローチカリキュラム**

- ◇ 小学校以降の生活や学習につながることを大切にする。
  - 直結するような知識や技能の習得ではないことに留意
  - 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に遊びや生活の環境を工夫
    - ・思考力の芽生えを引き出す工夫
    - ・協同して遊ぶ経験が繰り返しできる工夫
    - ・自立心が育つ環境の工夫
    - ・言葉による伝え合いができる場の設定の工夫



##### **スタートカリキュラム**

- ◇ 遊びの中での学びが自覚的な学びに円滑につながっていくことを大切にする。
  - 子どもの発達を踏まえたゆったりとした柔軟な時間割や学習活動の工夫
  - 生活科を中心とした合科的・関連的な指導の充実



[例] 3つの学びの時間帯(学習の類型)(※週案や学習予定表作成の参考)

- ・〇〇タイム(人間関係づくりなど安心をつくる時間)
- ・〇〇タイム(生活科を中心とした合科的・関連的な活動や学習の時間)
- ・〇〇タイム(教科等を中心とした学習の時間) など